

③ 川とまさきづくり

吉村伸一

——川の物語性—まさかりが淵の民話から

①—宇田川まさかりが淵

宇田川の村上橋のちよつと上流、深谷町と汲沢町の境目あたりに、まさかりが淵と呼ばれる滝がある。その昔、このあたりに一人のきこりがいた。ある日、木を切っていたきこりは誤ってまさかりを滝つぼに落としてしまう。「これはしまった！」と滝つぼをのぞいて見ると、たまたまことに、滝つぼの底はきれいで明るくて、その水の中にこれまたたまげるくらいきれいなお姫様が機を織っていた。

きこりは、おそるおそる「そこのまさかりをとってくださらんか」と頼む。すると「私はこの滝の主です。私のことを人に言わないで下さい。約束を破ると命はなくなります」と言って、まさかりをひろってくれた。きこりがまさかりをかついで村に戻ると、おどろくことに自分の三回忌が行われている真つ最中。村人からしつ

こく問いつめられ、つい「いきさつ」をしゃべってしまう。その途端、きこりはぼったり倒れ、そのまま死んでしまう。それ以来、この滝をまさかりが淵と呼ぶようになったという。

②—物語性のある川

まさかりが淵に伝わる民話は、そのあらすじからいうと、浦島太郎のそれにも似ていて、これを地域に伝わる歴史的・文化的遺産というには、少しおおげさすぎる気もする。しかし、重要なことは、川という自然を舞台にして、民話や伝説が生まれたという事実である。いかえると、川がそういう民話を生む舞台になりえたという点、そして、それだけ自然とのつきあいの深い生活が存在していたということである。

河川改修前のまさかりが淵に立つと、水の汚れは別として、なるほどと思わせるだけの雰囲気があった。左岸に迫るがけと樹林、滝つぼは深く、川は曲がりくねって、竹やら木でおおわ

- 一—川の物語性—まさかりが淵の民話から
- 二—川体験—昔の子ども、今の子ども
- 三—川とまさきづくり
- 四—おわりに

れていて、ちよつと入りこめない。民話の舞台としての条件は立派に残っていたのである。

民話というのは「つくり話」である。その「つくり話」である民話が、その場所にたつとリアリティーをもって語りかけてくる。それは、自然のリアリティー、怖さ、危うさも含めた自然の多様さがあるからである。民話の場所性というものを考えると、そこは、滝つぼや深い淵、うす暗い場であったりと、何がしかの不気味さや危険を秘めていることが多い。物語性のある川というのは、そういう多様さを備えた川だといえないだろうか。そして、そういう自然の多様さと人間とのやりとりとして民話が生まれると思うのである。

今、「親水」ということが言われている。川をもっと親しみのもてるものにするのは大切なことである。しかし、これにも注意すべきことがある。「親水」というのは、人間の側からの、ある親しみということであって、それは多分に川の

写真一 整備前のまさかりが淵



もつ多様性やリアリティーの排除につながるということである。いつも人間にとって快適で安全である状態を求めるなら、川は実につまらないものになる。そういうところをもう少し深く考える必要がある。

二——川体験—昔の子ども、今の子ども

①—昔の子どもの「川の思い出」

「春、三月頃になるとタニシが随分いたね。これは結構うまい。学校から帰るとバケツに一〜

写真二 整備後のまさかりが淵



二杯とってきたもんですよ。四月になると、田んぼに水をひくのに水門をはる。うなぎやどじょう、なまず、たくさん魚がいてね、夜『火ぶり』といって、松ヤニを燃やして灯りにして、モリ（クギをブラシのようにしたもの）で寝てるどじょうを刺してとったりしたね。カニもいた。モクタガニといってたけど、すぐくうまかった。これ、どうやってとるかという、カエルを二〜三匹つかまえてきて足の方から皮をむく。その皮で目玉をかくす。どうして目玉をか

くすのか、とにかく目玉をかくすんだね。そして足をタコ糸でしばって竹の先につるす。カニ穴の入口にたらずとカニが出てくる、そっとあげて水面すれすれの所で一気にとばしてとるんですよ」「川とはきつてもきれいな、そんな毎日でしたよ。せきの上流はプールみたいなもので、そこで泳いだりした。とにかく魚は豊富でした。夏なんかは家の中では寝なかつたもんです。木の上で寝ていて三時半ごろには起きて、前の晩のしかけをとりに行くんです。というのは境川から和泉川にかけて、うなぎのしかけがずらっと並ぶんです。遠くから、これを商売にしている人が来るからうかうかしてられないっていうわけです」

それはもう本当に楽しそうだった。今の子どもたちには想像すらできないであろう昔の子どもの川体験、川体験というより、それが毎日の生活そのものであったといえるだろう。これは、和泉川流域でその少年時代を過ごした年配の方々からうかがった話である。

②—今の子ども川の川体験

一、四〇一人中八三人、五・九パーセント。こうした数字を見ると、改めて今の子どもたちの川体験の少さにおどろく。これは、和泉川流域の一一の小学校で昨年暮れに実施したアンケート

1つ結果のひとつである(四年生四〇クラス)。つまり、「普段、近くの川や水路で遊びますか」という質問に対する「はい」という答えがそれである。昔の子どものそれと何と違いの大きいことか。

一方、「和泉川の名前を知っているか」という質問には約七七パーセントが「知っている」と答えている。また「和泉川を見たことがあるか」という問には、約六一パーセントが「ある」と答えている。一一校の合計では以上の結果であるが、学校によってかなり開きがあること、さらに、瀬谷区と泉区とはこれもまた大きな差が見られることが興味深い。この分析は「和泉川環境整備基本計画報告書」(現在作業中)にゆずるとして、川遊び体験が五・九パーセントであるのに対して、「和泉川の名前を知っている」「見たことがある」が、かなり高い割合であることに注目したい。泉区では、それが九四パーセント、八四パーセントである(図一)。

つまり、「名前を知っている」「見たことがある」というのは、地域の自然環境基盤としての川がとにかく認識されているということであり、日常生活の中で川と出会う機会があるということである。問題は、認識が体験に結びつかない、川が子どもたちの活動の対象となりにえていない状況にあるということであろう。

③—今の子どもたちがイメージする川

川体験をほとんどもたない、というより、もつことのできない子どもたちは、それではどんな川を望んでいるのか。和泉川流域で実施した「子どもの遊び環境ワークショップ」から少し紹介したい。参加一一校一一クラス四一二人(小学校四年生)である。

子どもたちが文章や絵で表現した「こんな川で遊んでみたい」という内容を、要素別に分類整理したものが表一である(これも現在分析作業中)。とりあえずいくつか気づいた点を述べてみたい。

まず、子どもたちが描いた(文や絵で)川のイメージであるが、上・中・下流に分けてみると、圧倒的に中流部の川のイメージが多い。これは、身近さという点で中流部の川の形態がイメージされるのではないかと思う。

水の流れ、つまり、水質、流速、川幅、水深などに関しては、水質に関する注文、「きれいな川」「すきとおった川」というのがダントツ

である。これは、今の川の現状から見れば当然といえ当然であるが、川体験をさまざまに表している最大の原因は水質にあることがはっきり表れている。少くとも「遊んで見ようかな」と思わせる程度の水質にはしなければならないだろう。

図一 和泉川流域子どもの遊び環境アンケート(4年生40クラス1,401人)の結果

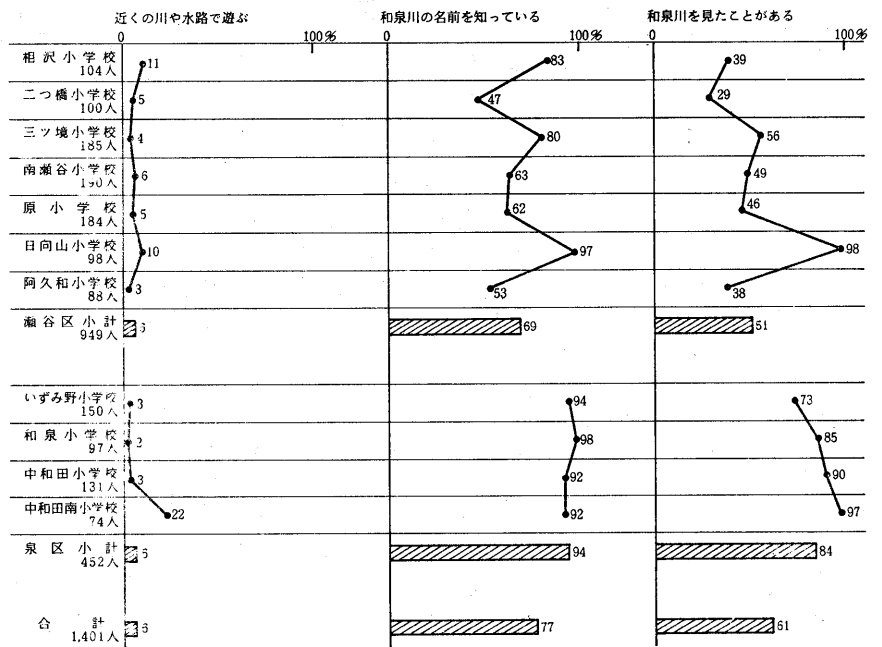
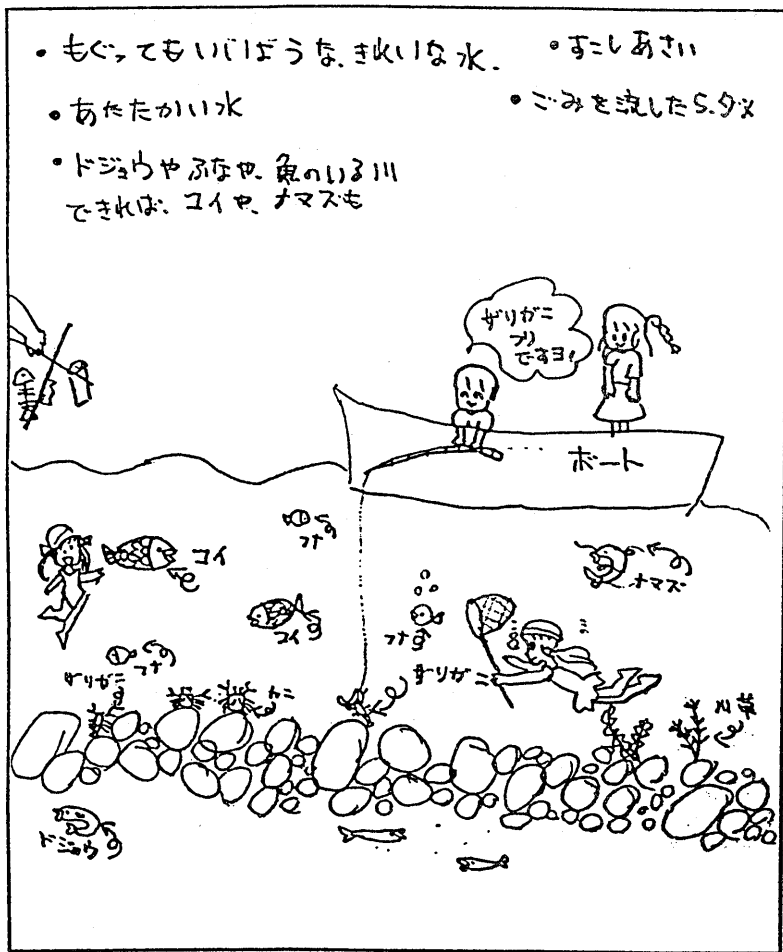


図-2 ワークショップで子どもが書いた絵



「川にいてほしい動物」これはもう圧倒的に魚である。次に多いのがカニ(サワガニ、ザリガニ)である。一方、ホタルをあげたのは五人。ムシが六人と極端に低い。水すましやトンボなど、水辺に見られる虫や昆虫はたくさんいるはずだけれど、子どもたちにはそうした虫などの生物がイメージできていないのである。また、た

くさんの生物の支えがあつて魚がいるということとは、あまりに見えてこないのだと思われる。注目したいことのひとつに、草木や花を書いた子どもが約一〇人、三〇パーセントもいることがある。さらに、石や砂利、岩、川原を書いた子どもが多いことである。これは、子どもたちが、川というと自然に近い、自然度の高い

川をイメージするということである。

さて、川辺の施設という点では橋が注目される。これは、橋がいろんな意味で川と出会う場であり、橋から川がよく見えるからであろう。そうすると、橋は川づくりの中でも重視すべき施設であり、橋から見える川の風景というのも重要だということがわかる。

川での行為という点では、泳ぎが一六一人、四〇パーセントで第一位。これと水遊び、川遊びを含めると五三パーセントになる。つまり、直接水と触れたいという欲求が非常に強いということである。

こうしてみると、子どもたちがイメージした川というのは、その体験のなさという事を考えると、はるかに豊かな内容を示しているように思える。そして、それは昔の子どもが体験した川と多くの共通項をもっていると思えるのである。

三——川とまちづくり

①—何気ない生活の文化

先の「昔の子ども」の川体験、川の思い出というものは、いわば「何気ない生活の文化」というべきものであろう。「京の文化」であるとか「江戸の文化」であるとかいったものではない

る。「端午の節句に丹後でタンゴの音楽会」、「嫁はなくても亭主関白宣言コンサート」、桃太郎を侵略者とよび、鬼こそヒーローとする「大江山酒吞天童子祭り」：聞いただけでも面白そうである。

この「逆手流まちづくり」もそうであるが、これからのまちづくりというのは、従来の地域のように、何か共同体としてまとまっていくというのではなく、むしろ個々人の生きがいの追求、欲求の実現という線上で、ある関心の対象について、関心のある人が集まって行動するということではないかと思う。地域というのは、そういう個人一人一人の欲求の追求、充足の場としてあるといえないだろうか。

まちには多様な人が住んでいる。だから、関心の対象自体多様であり、その行為もまた多様であるというのが自然な考え方であろう。仮に「べき論」で人を何かの行為にかりだしたとしても、一人一人にとって心の充足がない場合が多い。自らが自らの欲求に沿って主人公として活動してはじめて、活動することの楽しさ、生きがいというものを実感できるのである。そういう意味で、ある関心の対象についての多様な、自主的な行為がまちにあふれるということ、を、まちづくりの基本にすえる必要があると思うのである。まちづくりの主体は人間である。

だから、その人間が生き生きと活動している、その行為そのものが、まちづくりの中身ではないかと思う。

③ 一川とまちづくり

現代という時代は要求が多様化しているといわれる。この多様化した要求に豊かに対応するのは何かというと、それは、自然ではないだろうか。ある施設というのは、ある欲求を充足することはできるが、それは目的であり、行為も限定的である。ところが、自然とか川というのは、いろいろなかわり方が可能であり、そうした多様なかわりに豊かに対応するものである。

そういう意味で、川は地域における関心の対象として高いポテンシャルをもっているのではないかと思う。川が、そこに住む人の関心の対象になり、川に対するかわりの行為を通じてまちづくりがすすむ、そういう可能性を秘めているように思えるのである。

ワークショップでわかったことがある。子どもたちに、自分の遊んでいる場所を地図に色塗りしてもらった作業をしたわけだが、その中で「一番気に入っている遊び場」として、和泉川親水広場が、泉区の二校の子どもによってリストアップされたのである。瀬谷区から泉区にかけて

約一〇キロメートルの和泉川であるが、子どもたちがこの川で遊んでいる場所はおくわずかである。水質も上から下まで大変良くない。そんな中で選ばれたということである。

もうひとつ、子ども（ワークショップでは四年生対象）の遊びのエリアをみると、だいたい学区内とその周辺であるが、この和泉川親水広場の上・下流に位置する二校の遊びのエリアが、この広場の所で交さるのである。それぞれの遊び場の密度というのは、それぞれの学校の側

写真一 3 和泉川親水広場



に高くあるのが、この広場の所で子どもの遊び圏として広がりを見せているということである。

つまり、この広場が、子どもの遊び空間としての魅力を川に付加したということ、同時に、子どもの川に対するかわりの行為を生み出したこと、さらに、子どもの遊び圏というものを広げたということができるとであろう。

川を魅力あるものとして整備する、それは、川が人々の関心の対象になり、かわりの行為を生む、そして、その行為を通じて、人と人とのつながりが新しくつくりだされる、そういうまちづくりの展開のきっかけをつくることにつながる、そう思うのである。

④ 川・町計画—人の行動からのアプローチ

まちづくりの視点から川づくりにどうアプローチするか、現在作業中の和泉川環境整備基本計画の試みを、ひとつだけ紹介しておきたい。それは、地域に生活する人の行動からアプローチする試みである。つまり、町を人間の行動との関係でとらえてみようということである。そこで問題になるのが、誰を対象としたらいいかということであるが、私たちは、それは子どもにあるのではないかと考えた。

地域でその全生活を送っているのが子どもで

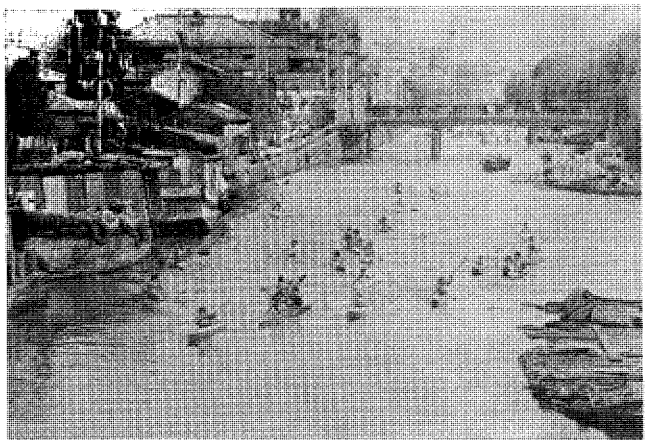
あり、しかもその行為というのは、遊びを中心として地域全体に広がっていること、自然や川に対する働きかけという点でも最も豊かな内容をもっていると考えられるからである。

子どもの遊びというのは、そのまま子どもの楽しみであり、喜びであり、生きがいである。そして、遊びの中では自らが主人公である。地域というものが、そこに住む人の欲求の充足の場であるとするなら、子どもの多様な行為の中にこそ、人々が主体にかかわる関心の対象というものを発見することができないのではないかと思われる。先に紹介した子どもの遊び環境ワークショップ、アンケート調査は、そういう視点から実施したものである。

四—おわりに

「最後の時、写真を写したときと、おじさんたちと、あく手をできたことが一番の思い出だった。もしかして、おじさん、これからの横浜市を、どうしていけば良くなっていくのかを調べるために、一組の地図をつかってさんこうにしようとしたのでしよう。みんなの書いてくれた願いをかなえて下さい。ぼくたちも、水の気持ちを考えてあげて、どろ水の川をなくすために努力していこうと思います。また、つごう

写真—4 運河は横浜の風物（横浜縦断カヌーフェスティバル）



のよい日に来て、十二月一日みたいに楽しかったらいいなあと思います……」

これは、ワークショップに協力してくれた南瀬谷小学校四年一組のある児童から届いた手紙である。

私たちは、ワークショップで「川を大切にしたい」とか、そういう誘導は一切していない。「みなさんがどこでどんな遊びをしているか教えて下さい」ということで、一緒に作業をしたのである。だから、これは子どもたちが自分の遊び場を地図に記入する作業を通じて、自

分たちの地域環境というものを再認識し、その中で、川に対する思いをめぐらした、そういう表れとみていいのだと思う。それにしても「水の気持ちを考えてあげて」という発想、なんてすばらしいことではないか。

横浜の川の歴史性や文化性について、とりたててあげるものがあるかどうかはわからない。ただいえることは、生活とのかかわりとしてそれをみることはできると思う。昔の子どもが今生き生きとしてその川体験を語ることができ

る、そういう体験を今の子ども遊びの中につくりだしていくことが重要なのだと思う。川と人とかかわりの新しい歴史、文化をつくる、そういう地点に今たっていると考えている。

△下水道局河川工事課▽